

混和会とは、共に許し合いながら、他の人格を尊重し、共に生きる和の構築を目指す集いです。

ほとけの 混和会だより

平成三十一年二月

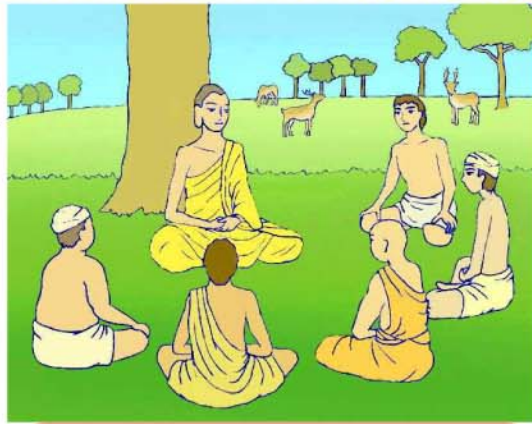
東光院

仏の混和会

第139号

三宝に帰依

第2



画 有馬志保

私達は皆幸せに成りたい、安心の抱ける日々を歩みたいと様々な願いを抱きながら人生を歩んでおります。しかしどこに向かって歩んだら良いのか、そして何を幸せとし何を価値あるものと定めたら良いのか、生きる事の顕かな灯明が欲しいと願いつつも、なかなか見いだせないのが現実です。そこでお釈迦様は人々の生きる事の指針と成るように「三宝に帰依」と言う教えを示して下さいました。

前回は記しましたが「三宝」とは仏法僧の事でインドの言葉でブツダ、ダルマ、サンガと言います。「ブツダ」大自然大宇宙の「ダルマ」大自然大宇宙の「サンガ」仏心会得の為に

慈愛心の完成を求める集いやよりどころ。

この三宝を敬い帰依する心境が会得できた時、真の幸も安心も抱け、更に命の継承する尊さも見えて参ります。

そこで、この度は「サンガ」のあり方に付いて、私なりの受け止め方をほんの少し綴って見ます。

この「サンガ」とは本来悟りを求める教団とか宗団を言うのですが、そのような大きなものとして受け止めるのでは無く、身近に集う環境に於いて共に慈愛心を育み仏心会得の為に共に寄り添う「よりどころ」と受け止めたいと思っております。

仏心いわゆる優しさを施す時「私は何々をしてやっているのに」とか「私がしてやった」などと恩に着せたり己の功績として誇るのでは無く、

無条件で己の優しさを他に施し無心に他の幸を喜びとする行為を言うのですがこれは大変難しい事で御座います。しかし他人同士でも共に他の幸を願う家族的な環境が築けたなら「サンガ」として真の幸と喜び、そして生きる指針も命を継承する尊さも見いだせるものと思っております。

サンガの集い

去る二月三日、恒例の節分会が執り行われました。

東光院の節分会は共に徳を積んで魔を払うと言う行事で、おかげ様で二十年の歳月を重ねることが出来ました。

この二十年の間人前に出ること無くそば小屋で早朝よりそばを打って下さった宮崎洋さん、田久保昭吉さん、林政彦さん、そして各役員さんは元より毎年福豆を奉納して下さいる岩井良夫さん、鳥羽満さん、宮崎利江さん、更におそばの茹でる係は現在三代目、初代は菅沼文子さん、横尾千江さんに横尾ユキさん、鳥羽よしさん、二代目が岩井良子さん、横尾キミさん、横尾真智子さん、横尾幸子さん、そして現在の三代目が林かほるさん、菅沼紀子さん、山崎勝子さん、横尾静枝さん、そして設営の準備から色々とたずさわってくれた五十嵐功さん、その外にも毎年焼き鳥を焼い

て下さった横尾一夫さん、更にフランクフルトの山崎美恵子さん、鳥羽裕子さん飯岡正子さん、そしてこの日の為に野菜を栽培してくれた小泉三千雄さん横尾光治さん、更に忘れてはいけない人が三匹の鬼を造ってくれた故人と成られた横尾文雄さんです。この鬼は私達の迷いや苦しみをそして様々な災いを招く三毒(貪り、瞋り、愚痴)を鬼に喩えて造って下さったのです。依頼十七年間、手や足は折れながらも耐え忍んで私達を導いて下さっております。

その外にも此処に書き記せない沢山の皆様のご奉仕、又善意の御心を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。 亮観拝



日本の仏様

番外編



日本仏教に登場する仏様を紹介しているのですが、今回は『番外編』と題して古典伝統法儀と呼ばれるお経の『聲明』を紹介します

● お経 聲明

『聲明』とは、法要や儀式の際、お経や御真言に旋律や抑揚を着けてお唱えする、仏教音楽曲を言い、海外からは西のグレゴリオ聖歌、東の聲明と例えられるお経の唱え方の一つを言います。

聲明の始まりは古代インドで、その当時は『梵唄』と呼ばれる学問とされていましたが、仏教の教えが形になるにつれ、儀式の大切な要素『聲明』として日本へ伝えられました。

日本での聲明の歴史は今から約一二〇〇年前に行われた奈良東大寺の大仏開眼供養において千人もの僧侶によって聲明が唱えられたと記録にあり、その後弘法大師空海が男性的でダイナミックと言われる真言聲明を、最澄の弟子慈覚大師円仁が女性的で優雅というられる天台聲明を日本に伝え、この二つが現代各宗派で唱えられる聲明の母体とされています。

また、抑揚を着けて唱える聲明はお経の枠だけには収まらず、日本文化の中で大きく発展を遂げていきま

す。

琵琶を弾きながら歌う平曲や浄瑠璃、能の舞台で唱えられる謡曲、庶民の間ではお祭りの神様に捧げる祭文や大阪の浪花節、民謡に盆踊りの唄などに変化をとげていきました。

また聲明に使われる用語の中には音程や音域を表す『調』や『律』といった言葉が登場するのですが、学校で教わる五線譜の楽譜に使われている西洋音楽用語を日本語訳にする際、聲明用語が引用され当てはめたという説もあります。

これらを踏まえると、今テレビ等で耳にする邦楽の源流も聲明に有り。とも言えるかも知れませんね。

ところで、なぜ今回『聲明』を取り上げたかというと、去年より天台聲明の伝承と研鑽、紹介を目的とした『七聲會』という会に所属し、活動させて頂いているのですが、昨日行われた公演の様子が

『日テレ アップDate!』

(三月十日 (日曜))

朝五時四十分放送)

と言う日本テレビの番組で取り上げて頂ける。との事でしたので、この場を借りて番宣をしにきました。

短い番組とのことですので一瞬かも知れませんが、聲明について少しでも興味を持って頂ければ幸いです。

亮澄拝

三月三・四日は 深大寺だるま市へ



法助先の深大寺では、毎年三月三・四日に元三(がんどん)大師 大祭通称「春を呼ぶ深大寺だるま市」が執り行われ、大いに賑わいます。

深大寺のだるま市は、かつて盛んだった養蚕の蚕の繭と(調布の地名に由来)、火災に遭いながらもその都度復興してきた寺の様子をダルマの七転び八起きに重ねたことから江戸時代に始まったとされ、日本三大だるま市に数えられております。当山ダルマ市の最大の特徴は、お求めいただいたダルマの目に僧侶が物事の始まりを意味する梵字のア字を入れて魂入れを行い、納めのダルマには終わりや完成を意味するウンの字を入れてくれる点です。



また、各日一三時四〇分よりの大護摩ではお練り行列が行われ、私も三日は雅楽衆として、四日は先導法螺の役で出仕致します。通常の護摩祈願も随時行っておりますので是非皆様のお越しをお待ちしております。

味噌の仕込みを行います

先日、節分会で振る舞う東光院の自家製味噌の仕込みを行いました。水に浸した大豆を大鍋で煮込み、米糶と塩をまぜて専用の機械でミンチ状にして瓶に隙間無く詰めていく、なかなか手間のかかる作業ですが一年後の節分を見据えて毎年行っております。

近年では住職が麴作りにも手を出し始めた為、毎年研究を重ね苦労しているようですが、より手の込んだ仕上がりに向かっていくのではないでしょう。か。

亮敬拝

